

ある「日本語教室」の思い出

切刀 和子

40代後半、いろいろなことから解放され自由な時間が持てるようになった。そこで何か一つ習い事を始めてみようか、と思い立ち、さっそく市の広報に載っていた講座に申し込んだ。朗読・謡曲・太極拳・ヨガ・フラワーアレンジメント・中国語・・・1年後気がついたら残っていたのは中国語だけだった。

そんなころ、中国帰国者に日本語を教えているという老婦人に出会った。日本語を教える？おもしろそう！迷うことなくその仲間に加わり、いつのまにか10数年が経った。ちなみにその日本語教室は「中国帰国者のための日本語講座」（県委託事業）が正式な名称です。3年前にその講座から退いてはいるが、そこでの経験で特に印象が強かったエピソードを二、三紹介したい。

ある日の授業から

*70代の男性 来日して久しいが、言葉の学習に年齢の壁はいかんともしがたい。「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」・・・程度はOKだが、それ以上になると？授業中皆と一緒にの口頭練習の時はできるが、次の週には元の状態に戻っている。そんな状態が長く続いたある日、「体の具合はどうですか」と尋ねると「めまい、頭くらくら、ダメ・・・」とジェスチャーまじりに必死に答える。手まねをしながら「注射したい、体ふらふら、薬飲む・・・」と以外にたくさんの単語がとびだした。

そうだ！覚えなければならない必要不可欠な言葉は覚えられるんだ。『伝えたい』という強い気持ちさえあれば、何とかなるのでは。文法は後からついてくる！

とかく教師は、教えよう、理解させよう、覚えさせようと熱意ばかりが先走るが、その前に学習者が『習いたい 覚えたい』日本語とは何なのかをきちんと把握することが大事だと思い知ったでき事だった。

*ごはんを食べます→食べません、食べました→食べませんでした、食べましたか、の説明をしていると、若い男性受講者が「先生、僕の会社では『おい、飯食ったか』です。」参ったなあ、そんな言葉を知ってるなんて、でも、そうですね。その場の状況、使い方によっては、「飯食ったか」の方がしっくりした表現かもしれません。

「おいしい」ではなく「うまい」、「お体はいかがですか」より「元気か」の方がふさわしい場面だって多いはず。要はことばのT・P・O。受講者がふだんど

ういう言語環境に置かれているのかを知るのも大切なことだと思っただけ事だった。

* この頃多い、何かと話題の中国のお嫁さんの話し。2歳ぐらいのこどもを連れて熱心に受講に来ていた。男の子に恵まれて幸せそう、が、聞いたところによると中国大都市の出身だが、婚家はだいぶ田舎の農家とか。慣れない異国での生活と子育て、農村の古いしきたり・・・のようなものにストレスを感じているのか、授業中の発言は殆どない。聞く力はあるようなのだが積極的に質問することもない。

ある日、授業終了後たまたま同じエレベーターに乗った。まさにドアがしまろうとするその時、彼女の甲高い大きな声が響いた。「いびっちょ！！」子供が物珍しさにドアに触ろうとしたのだ。

ます形「触ります」辞書形「触る」動詞①グループ禁止形「触るな」等の文法項目を一挙に飛び越えて、突然口をついて出た言葉「いびっちょ」。言葉の学習はたしかに「習うより慣れろ」だと実感した一幕だった。

今頃彼女はたくましく周囲の環境に順応し、日本語を巧みに使いこなす頼もしい母親になっているに違いない。

* ある日の授業、ほとんどが帰国二世で働いている人たちが受講生。「わたし明日会社休む、いい？」と言ったら、上司は「わかった」と答えた、と1人が報告。言葉は意味が通じさえすればいいというものでもない。

そこで今日は、休暇の申請・欠席届の表現の勉強。がそこでいつも困るのだ。文法的に正しくて適切とされる表現を提示することがいいのかどうか。

1. ○○なので、お休みさせていただきたいのですが
2. ○○なので、お休みをお願いしたいのですが
3. ○○だから 休ませてください
4. " 休みます。よろしく申し上げます
5. " 休んでもいいですか
6. " 休みたいです

例えば、この6つの言い方のどれを示せばいいのか。先に述べた「飯食ったか」の職場で1を使ったら間違いなく周囲の失笑を買う。生活者にとってはまず使える言葉を覚える事が最優先だと考えるなら、4が無難か。結局どういう場合にも使える便利な日本語「申し上げます」を強調して授業を締めくくることが多かった。

敬語の指導をいつ、どのように、どの程度まで教えるかという問題でいつも私は迷っている。

言葉の学習、特に地域で暮らす生活者に、こうあるべきだ、という唯一絶対の学習方法などないと思っている。コミュニケーションに支障をきたすおそれがなく、お互いに伝えたいことが伝え合えるならば、助詞の間違い、ちょっとおかしい発音など気にしないことだ。それらの間違いは言葉の上達につれて自然に修得されるものも多いのでは。大事なことは「もっと上手になりたい」という意欲をそぐことのないような指導を心がけることだと思う。私はいつも日本語の相手をするという軽い気持ちも持って臨んでいる。

今、中国語は習い事ではなくボケ防止として、途絶えそうになりながらろうじて続いている。「活到老、学到老」（生きているかぎり学び続けるという意味の諺）と言い聞かせながら。